

## 社会科学学習における「わたしの学習」 ～追究し続ける子どもを育てるひとり学習の充実～

### 1 社会科学の学習を通してみえるものと、大切にしたい事柄

子どもは何かの事象にぶつかったとき、一人一人の物のみ方がちがってくる。その物のみ方のちがいが一番わかりやすいのが、社会科学の学習である。

社会科学の学習対象は社会そのものである。私たちが社会をみるとき、自分の今の立場や生活をもとにみている。同じ社会の事象をながめていても、10人いれば10通りのみ方があるだろう。そして、社会とはそのようないろいろな立場をもち、生活をしている人で成り立っている。社会とはそういうものであるから、子どもが社会をながめたときにも、私たち大人がそうであるように、いろいろなみ方をする。子どもは自分の立場で、自分の生活を基盤にしながら社会の事象に迫っていかうとするのである。だから、それぞれの子どものもものみ方の違いがよくわかる。そして、その子どものもものみ方を大切にしながら、学習によりそのみ方を広げたり、ふかめたりすることで、子どもが、社会の問題と直に向かい合うことができるのが社会科学の学習である。

また、子どもは社会科学の学習を通して様々なものを学ぶ。知識、技能、対象とのかかわり方、自分自身のあり方にかかわるものなどがあげられる。これらのものを主体的に学ぶことの楽しさや値打ちを感じ取れる学習を作り出さなければならない。その条件として次のようなものが考えられる。

- ・対象とかかわることで一人ひとりのその子に応じた問題意識がもてる学習
- ・問題を解決しようと対象にはたらきかけていく中でわりきれない思いが生まれる学習
- ・人々の生活が人間らしい充実したものになることを願う子が育つ学習

子どもは単に知識（社会のしくみや歴史的事実など）を得たことで学ぶ喜びを感じることができるわけではない。それらを知ることでも喜びは感じることができる。しかし、子どもは、学習対象とかかわることで驚きや感動を得て、自分自身の考えが生まれることや、自分なりの問題意識をもち、その中で自己表現ができることにより、自分のあり方を見直し自分らしい成長を実感することができる。そして、子どもが学ぶ喜びや充実感をもってかかわっていく対象の中には、人々の人間らしく充実した生活を送りたいという願いが内包されたものでなければならない。つまり、他者が自分のあり方を求める姿勢（人間らしく充実した生活送ろうと願う姿勢）にふれることによって、自分のあり方を見直すことができるのである。

### 2 主体的に追究し続ける子を育てる方法～全体学習を支える個別学習～

#### (1) 個別学習の充実

私たちは授業実践者として、全体学習はどうあるべきか、いかにして全体学習を充実させるかということを念頭に置き授業づくりをすすめてきた。それゆえに、これまでの学習は全体学習を追いすぎてきたように思う。全体学習が全体学習らしく値打ちのあるものにする

には、個別学習にかかっているのではないかと考えた。今年は特に意識して、全体学習につながる個別学習のあり方を研究することにした。

個別学習を充実させるためには、まず、問題と子どもの位置関係を見極める必要がある。何を考えるべきか、解決の糸口はどこにあるのか、どのような方法で迫っていけばいいのかということが示される必要がある。子どもにとって問題があやふやであったり意識とかけはなれていたりしては、適当ではない。私たちは、社会科の学習として「その問題がどのような価値を含んでいるか。」「この問題を追求することで子どもは、どのような社会の問題と出会うのか」という目をもって問題の設定をする。

対象と出会ったとき、子どもは、様々な問題を持ち自力で追究を始める。問題が設定され個別学習が始まると子どもは自力で追求を始める。遠回りをするものもあれば、見当違いの追求を始めるものもいる。遠回りであっても、見当違いであっても、問題が具体的なものとして意識できていれば、“その子の学習”として成立していく。しかし、問題ははっきりしているもの、実際に動き出せない子は必ずいるものである。「持続できない」「発展できない」「つながりを見出せない」というような様相で表れる。そんなとき私たちは、問題の確認をしたり、方向性を示唆したり、実際に見学等を通じて確かめさせるというような支援をする。また、ひとりひとりの課題を意識しひとりひとりに期待するをもちながら、子どもの考えや願いの方向をさぐるという姿勢で支援する。同時に必要なのが「互いの刺激」という相互作用である。自分が今気になっていることや、調べていること、分からないことを機会を見つけて出すことができる環境づくりをする。このような活動をくり返して「互いの刺激」をすすめる。問題の設定がどの子にとってもいい位置にあることで、友達の追求が自分にとっても意味があるものになる。

### ・対象の選び方

まず、私たち教師は、どんな対象であれば、子どもたちが、個別学習を進めていけるのかを考えなくてはならない。個別学習をさせるにたえる学習対象であり、ひとりひとりの子どもが対象とぶつかっても、ひとりで学んでいける対象であるのかどうかを私たちはよく吟味する必要がある。子どもが、多面的にいろいろな角度から疑問や思いを持てるものが、学習対象としてふさわしいと考える。では、そういう対象と子どもたちを出会わせる時に、どのような出会わせ方をすればよいのかを考えてみたい。

### ・対象との出会わせ方

初めて対象に出会うとき、まず子どもたちがその対象に対してどのようなおもいを持っているのかということをお大切にしたい。「その対象に対して、ぼくは〇〇だと思う。」「わたしは、〇〇について疑問を持っているよ。」というふうに、いくとおりの思いを持たせたい。子どもが対象に対して予想や疑問など、自分なりの思いもなしに対象と出会うということのないように、私たちは指導しなければならない。そんな指導があって初めて、子どもひとりひとりが思いを持ち、個別学習をスタートさせることができるのである。

## (2) 「問題の設定」と「互いの刺激」の場である全体学習

全体学習に迫力をもたすためには、個別学習によって得た「考えあうための材料」をもつ

て、学習に挑まなければならないと述べてきた。また、全体学習における子どもの迫力は学習する子どもたちに「互いの刺激」を強く与える。「〇〇くんの言っていたことにはなるほどと思ったな。もう一度考えてみよう」「〇〇さんの考えは本当なんだろうか もう一度調べて確かめてみよう」「ぼくの考えは正しいと思うんだが、みんなは納得しなかったぞ 今度はこのことを調べてもう一度みんなに考えてもらおう」というような思いが生まれる全体学習でありたい。全体学習は個別学習で得た考えをぶつけ合う場であり、強い刺激を受けあう場であってほしい。

そして、子どもたちはまた、新たな問題が子どもの中に設定されている。もともとあった問題ではあるが「互いの刺激」があることで追究が深くなったり、鋭くなったり、広範囲にわたったりすることになるからである。

### 3 “もち・モチー3A”～わたしたちのくらしとものをつくるしごと (3年生)～の実践より

**対象の選び方・・・よもぎもち屋「燦々園」(的場さん)**

**☆材料に対するこだわり**

- ・よもぎは紀ノ川の河原 ・小豆は北海道産 ・きなこは長野県の契約農家
- ・もち米は新潟のこしひかり(無農薬) ・水は湯浅の山田山のわき水
- ・水は湯浅の山田山のわき水 ・塩は赤穂,

**☆製法に対するこだわり**

- ・むかしながらの杵と臼を使っての手作り⇒特色ある生産方法

**☆的場さんの「人となり」**

- ・自分の仕事に対する誇りと謙虚さ、向上心を持っている方。

**対象との出会わせ方・・・**

**「どっちのおもちショー」～おもちの食べくらべ～**

「こんなにおいしいよもぎもちをだれが、どんなふうにするのだろう。」「材料は何を使うのかな」「的場さんってどんなおじさんやろ」「おもちを食べ比べてみると、ぼくは大量生産で作られたおもちの方がおいしいから、他のおもちも調べてみたいな。」

**対象との関わり方・・・**

学習を進めていくうちに『おじさんは、あまりたくさんのおもちを作っていないけどお金もうけができていないのかな?』というような学級の共通の問題が生まれてくる。この問題を個別学習として追究していくと「材料や作り方にこだわりを持っているからたくさん作れないこと」「おじさんは、いつもひまそうに見えてたけど朝4時からもち米を蒸していたこと」「大事なよもぎもちだからひとつひとつ手作りで作っていること」など人の生きざまに絡んだ学習にいきつくのである。

**学習後の子どもの思い・・・**

この学習が終わったときに、「おじさんはひとりでも多くの人に、自分の作った自信満々のよもぎもちを食べてもらいたいんだな。」「自分はそんな人々が住んでいる社会の中で生活しているんだな。」という思いを持つ。